

評 価 の 評 価

神田 幸則(九州大学)

最近、こんなことがありました。

学生がある中性子源のエネルギー・スペクトルの測定をしました。中性子スペクトロメーターの応答は複雑で、特に、この中性子源のように連続な分布をするスペクトルを測定するのはなかなか大変な仕事です。測定された生のデータを中性子スペクトルに変換する手続にはいろいろな方法がありますが、いずれも計算機で処理するのが現在の主流です。彼はその一方法の適用範囲を拡張すべく努力中でした。計算機からの出力すなわち得られたスペクトルを今迄に測定された結果と比較しながら、処理コードの改良を続けました。しかし、なかなか彼の参考としているスペクトルとは合いません。一致することはないにしても、今問題としているエネルギー範囲にある一つのピーク位置だけでも参考としているものと合うのが正しいと信じ、そうなるように種々努力してみました。結果は希望通りには参りませんでした。多くの時間と労力をかけた後で、彼は前から言われていた文献を調べることにしました。というのは、彼がそれまで参考としていたスペクトルは教科書に載っていたもので、最近のデータを調べるように示唆されていたからです。調べてみると、その中性子源のスペクトルの実験値はいくつもあり、しかもお互いの結果には大きな違いがあることもわかりました。そして、それらの傾向はむしろ彼が参考にしてきたものよりも彼の得ている結果の方に近いことも見出しました。

イソップ物語ですと、ここに二、三行の教訓があって終るのですが、それではあまりにも恰好が良過ぎるし、気障なので、以下筆者の註釈をつけます。

彼が最初に参考としていた中性子スペクトルは教科書に描かれていた、いわゆる一本の線であった。多くの労力と時間の消費を彼に強いたのはこの一本の線に対する信頼であったと思います。もっともらしく引かれているこの一本の線を疑わなければならないという経験を、彼は今迄に持たなかったのです。よもや、学生実験でも使うような中性子源のスペクトルがまだ確定していないなどとは思いつかなかったのでしょう。

一本の線が信用ならない、というよりも、正確には彼の計算機の出力と合わないばかりか、仮かの測定結果からも、その線が正しいと言えなくなるとすれば、その一本の線ですてるのは当然です。そして、比較のために彼はどの実験値を選ぶでしょう。わざわざ一致の悪い値を選ぶとも思えません。といて、合っている値のみを探るのは良心がとがめるでしょう。しかし、合わないデータを選びたくないのは人情です。実験値の選択に良心や人情がからんで良いものでしょうか。それではすべてのデータを採用すべきでしょうか。

彼がどのような基準によって、参考とすべき実験値を選んだかは知りません。ただ、可能な文献をすべて調べて、その文献の内容を検討し、あいまいな記述の文献は捨て、誤差を加重として平均し、計算機で処理し……といったことはしなかった。これだけは確かです。

以上、なかなか与えられた字数の大半を費してまでこんな例を書いたのは、この話に核データの問題あるいはJNDUの歴史と現状を投映すると、私なりに思いつく問題点の多くが浮彫りにされて来るように思えたからです。最後に、この拙文の題を「評価の評価」としてあることを思い出して頂きたい。そして、このほかにも「評価の評価者」「評価者の評価」「評価者の評価者」という題も一応考慮したことを附記しておきます。